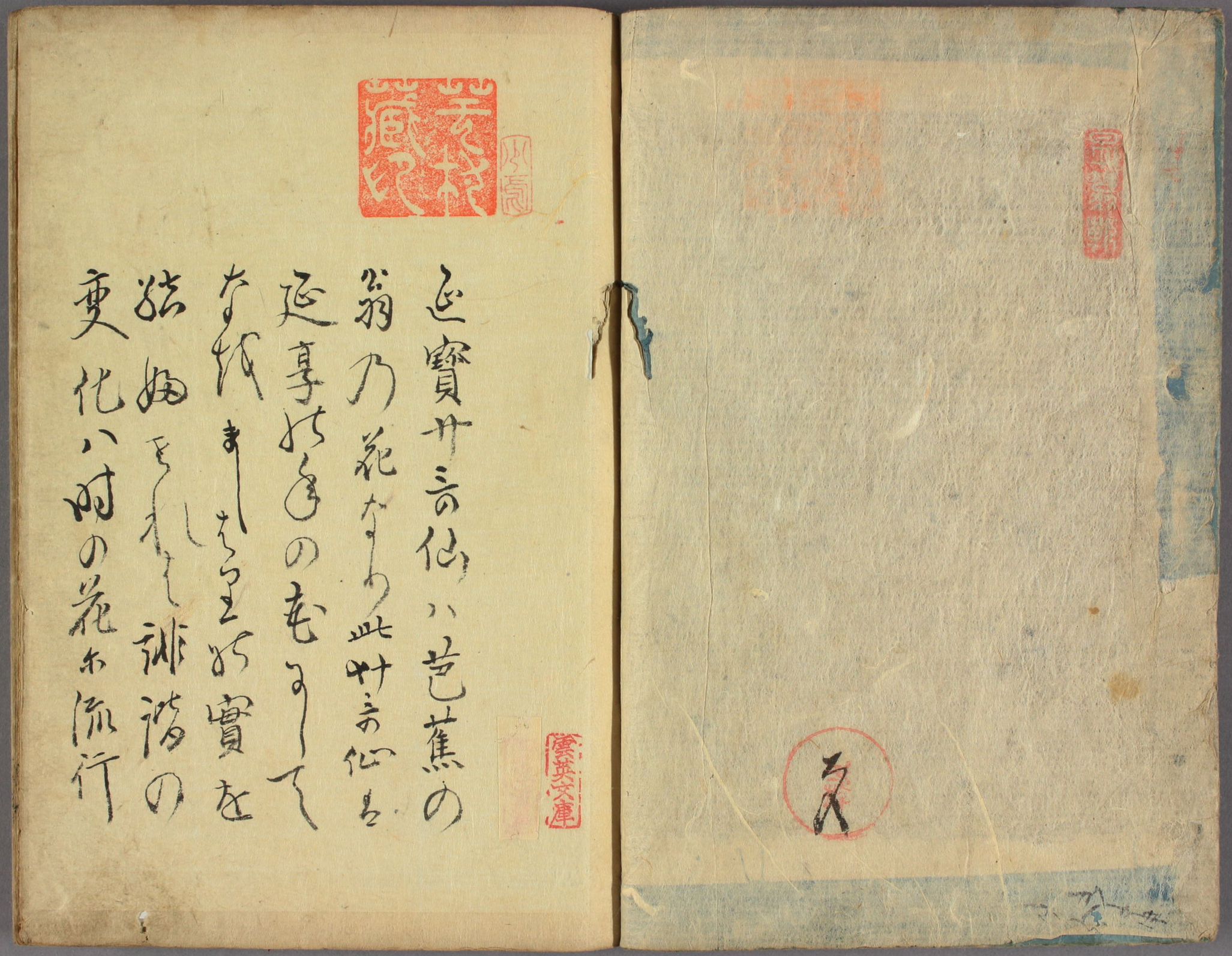
江戸甘歌仙

全



慶應義塾図書館

慶應義塾

すとも一四風のまことを
霜ふりまさる荒み
ちくさ百世千趣成
物のくさ物あつて
褒貶之法きハ
之法このくさ後り
物ものとあるとあ毎ものを

悔なの為魚家のおかよのて
一之物竹詞義云多を
四時乃緇林とよなして
今まさ諸紀を束ねハ
彼山中不材の無用
なる成除きくなるよ
梅柳のこまこのなるよ

[illegible]ふ志のうちを心を江戸門
のひろ[illegible]ゆ哭終て
風情ハ[illegible]の言根乃をゝ
あるを[illegible]

第一　湖十

梅おもきなのしも初く身枝哉
初いなひうわ雲やうの末
大名ゆきさ前乃小雪ゆ惜わて
雁ゆ[illegible]れしをむら雨乃行
一艘と二艘と渡し漕わの代
ゆつまくあ事やい門の賣物

干瓜を吹けて鰹乃節抜き
三味線の音ばかりなる深川
十五夜のうちの間乃長さ
中の尺さに漏刻を賞
大垂濃打わく紫なる下屋敷
青い屋ちゆよ蓮ふ藪入
多ちまこに貸を置かなき後帯
月傾時て蔦乃図お

る袋大坂人の履諸く
子年ホまさる元勢乃美
花の玄圃呑うま併たけ
京ふ磨うす灰毛猫あ
廻付迄雪を欲をちくすちのわ
日待の不化城寂う次紅国
氣のぬけ縄ともちに五月
麻と青乃乃門伝蔵祢

八男社稷を足尊と只是
灯ん黄て元紙を出る
清秋乃古びよ冬を待れ
光もいろ〳〵下れゆきて
あつまり〳〵在嘉城の秋半乃蜂
肖虚よあく高富士の頂上
瀧落いるかぬ紙のよ升のく
杜も木こまを内かくの人

日乃軒の雪を踏らく中禄寺
菩薩も世よ焚出の飯
脇ちの寺さに猿乃立すく
毛氈ニ扱借り和と尺
老松ハ出恩の門を美の杖
雲の瑞雄よ大吉ち幕

宇二

盤谷

明星とむのこゝ今宵蛙かな

艸乃露やふも結ふたそこの

演焼の鯛を横ゝ見をかつて

静の骨眼洗ちさ芽鼻低

昼中を玉の兎や眠るらん

ゆゝとも毎に秋そさゝ雨

朝のほの花ハ何とす茄子漬
宇治の焙炉ハ唐こうぢ俳遊
桶仰桶もなよしなし八乃宮
浮と禮さに蕾惜ぬし
をつのくをの血の如ふ里莧
面この如竿〳〵爪立ふ妻
床のきれいの字もこひよ出ぬ
四十すてハあい国夏

横广路を半分打て遊山網
耳を引出す寺ふ紀の月
菊の山ふとれ寺ハ皆ふ
千羽鳥も雲入鳥
湯もせめか茂侍乃歩行
献立よ亦ふ尚朝会の産
炉開や狂言袴淺茅ふ
ひきハぬ〳〵満京の松

斉まくら結へ向ける馬の鼻
小娘ひとり帯結ぶる足ゆ
ぬつとれく夢れて蛇も行かひ
ふまを拾く社　町もにぎやか
弥陀ふの心隠居ハ西の南門跡
ちゑ　萩ゆ袋を花ゆと
妹なくら蓮も深く蓮の夕
蕎麦垣根ゆ刀豆の蔓

鹿笛の庵ハ寂る秋もなのうなる
筏行てても嵯峨九た哉
嘘つのあ人を叩ハ京庚申
茉包ゝ年　伽羅も一　炷
大名と向ひ合るされちのう
楓も力の丸むすゝ　久阿

出代や枕乃夢のなきところ　和推

忘れ返河の果ぬ春衣

名のきき花ぬ画ま旅ちて

引盃ささむ菓子

清と畳ハ信り水の月

薮柑子照内揚石の側

米つきに江戸へ越く人の声
遥はるくなる吉乃山風
我なるゝ月ハ泪のある事哉
立て出く来る傾城乃帳
姿徒へ向くハ恋ゝ朝ぼらめ
纏れ音ゝ越れ来の子
笑にく自由の見るたのさハ
越へき峯乃翌の情物

本服乃うぶぼよ海ゝ弓八幡
好人とやうに降時れ雪
秋拵る月の入ち乃借ー小袖
白きうの上の彩豆腐なり
きのゝ書ゝ窓暗かゝ桐乃秋
茎さへ、なゝの次留主の紫苑
菅笠て風よ言まゝ甚すかゝ
月よ七日乃法の書乃

親の氣け休も一門義を建
物よく賣られて行例ハ武士
産めを取罷おそろき者卵
供も見うくる夕くれの達
辻賀て前渡する云為何
髪を惜めを容儀こがれる
夏ハ月浴衣ハ伊豫簾
ますふ心の冷やかと敬

律僧乃裸てひとの糸と針
書物ハ僧ハ庵人とを取る
山川の風も靜ハ茶釜燃
百乃上うら毎日を訪ふ
先達ハ色おもしろや花盛
耕敬を乃付まり

戸四

存義

弘法のこゝろを一字ふさぐ
柱杖ゝむきゝ滝乃いとゆ
長歌よくもゝを味て
ち歯二枚ハ氣牙ゝわり
兒醫者にふり袖ゝ世て月の真
かゝ江徳ゝの庭ゝ初沙

稍洗濯せさせ給へたこ入
俳やうよ似くる鰯乃面
鄙つきも夏の月八伊勢簾
うくたしくるほ家の黒髪
くくゝ二日幕もらぬ物思ひ
鴨いいやこのと該月枝打戸
老ち老て人も亨ん雪の簑
吹戻きく谷乃小伝

紙う往む昼もくるのおれ興
花ゝ下司の小言ゆく
清末ゝ末八負もおゝ月
俳句乃狐ゝ明すゆ
ものゝと共ゝ古曾丸関おえて
酒呑ぬ日八一日庶こゝめり
ほくゝ寸酔吟鳥又ゆんこゝ
佛間ゝ寝ゝ爰を俳ゝ

おもてに紅の二布よ我なを
芝居城もる浦の商ひ
捕者のさいきよ仮のなくなりて
白髪天窓の悔たるも無
鞠師の名葉八人も笑ふ
狼　吼る　壱山　陸
松茸の あしたこそ 松ふり
蟲の 玉つゝ 城ます 高 雷

下祢宜を一門ハ持ちぬ古屋敷
しゝハと尺して元日の灸
毛ぬのゝ孫表玄表並花陸
夜のたくまを叶ず旅寝
逃なるゝ門さゝを濁酒破乃波
日和このくまる 禅の 塩 梅

五

有佐

賤乃女の切火よ清　蓼　栅

よい茶乃匂ひ奥深き　李

代士ハ花ある厳ハ帯ゐた

伺ま〇く泊ハ五十三次

旗竿の如く涼支風ハ有

芝朱乃笠の一名まわ有

井戸堀れ器へとれたるもの
裂と羽織乃屋守寄合
倫旨あり夜ハ指葉の入所
婦乃半ばとなりて大雪
當世の二の部しい寄額付
三〳〵甲斐なく的の灯の消
森川ハ怖くなりて一里塚
五夜の綱ゑ瓜や李の

昼乃夜幮の釣ゑ城玉祥
細工ゑ小袋さまゝ足袋
縁革ゑ裏ハうつみぬ巻きを
笑ひ〳〵暦借ゑ出のゆ
大雪ハ天ゑ舞ひて地ゑ釣
十二三ゑる孫を抱妓有
西側ハ女の面倒淺草寺
夫似るゑりハ出来ぬ取揖

伯賣の暖簾ハ枝乃下を吹
甲陽軍ハいろはかく漬
人たる奴盗ミ白紙柿乃兼
去来の方拾めつゝよいなり
分量ハ目の性よる身持新
囃子乃伝をむすめの教すゝ
為盗の平四よなり新田姫
死ともゝ

膏薬ハ貼へき湯屋よりハ
風よ衣ハ臼イ帆を切
汚濁なるお七の絵言を見るゝ
羨とや いたん今のすゝ
様の巻寝間かゝ草鞋履て出る
はくゝ水もゝ多 塵はゆる山

六

平砂

山くハ雲こそ囲へも川鰐
十里乃楫の向ふ却ち忘
蓋普請手引れ石を多ふ庭
ふ迹るこそ下座ハする筈
風ひ消さ水て月枕さ
牧狩ハ御む辛城荒さん

角力取ることなめらか合
歌のもしれる堅の大石
あくも亦恠変て神や花ぬ人
をこのひとり破竜の声
妻なるぬ妻ハぬるす帯我抱
たをれも意罰ハ眼のあ
水際ハ見そ来名乃河つき
有明さむく帆の出をる

雪隠ハ御運使なき笘掛て
人参一の世仁王祈り世
器を忘れ四を恵まて志ハ仮
小級尺よと紀蛇のもめて
立前ハ出入屋敷我水の峰
侍を敬され志ハ搭酒
鶏下わて捨て詮義を紛れ
菌ハなのつ森なるハ咲

面影の移うたゝぬ清閑堂
多なる見なるまめなる篤信
磨げる苔は黒焼ゐハ立す
子話ける窓よ霊象ゑ窓
秋乃野乃矢み放さは五六通
三十堂と乃らゆゝい身
入唐の支度ハ爪よ灯をうり
禅たゝく谺乃音きけ

筑紫の松の齢も叫ぶまりて
脚をうき世の金を待らん
式吹雪清月のなるも雨ふし
鋪乃蔭まて便私をすれ
花の沈江戸と叫ぶ字ハよい字形
そのむと書あしを忘の如大風巾

才七

米仲

若竹乃向てゝ雷の音

かまきりの子も這まとる旬

朽まつ松のなる所ぞきらん

万年つけて小向の家

月見草を先五六升京氣上升

春も此

春も此秋くき秋沙

禅と今かきうの乃負すまふ
衣をぬくといき尚小坊主
古寺城ゝ尼いと尚下きゝ
姨捨ゝ手 續々 松 本
大橋乃業未ゝて立並び
尺知事を付れゝうゝれ面
末ぬ吹八桂月雪城いとまれ
景色のさゝあゝ生ゝとる

大坂へたんゝ流きの十三里
名の各ゝあうゝひすゝ引き
さゝの又茶ハちゝきぬ使 表
人形使るす 表の品みやけ
能登の出現佛ときくゝに
いふゝを尺せゝく男刀の表
捨扶持ようもかゝる相里氏
用の袋 紙 丑寅乃 表

きろくと湯屋てあつまく酒焉
ゑもれぬあまを膏茶ふ干
茶漬飯ざつと仕ゐて焚き出し
あんを多ふハをれこのもらをふ
為年をあとに冬き茗造
大豆をとり也むと云ふ湯乃
ひまれてハ闇かとおもふ十八衆
鉢切よりあとの陣の声

寒冷ゝ後ハ焚くくにおき
法方の状をゑとりて書
ゝらけいて何のけもなゝとひ雨
ゝ合ゝ合ゝまけぬ黒犬
毒盛青かゝ舟ゝきえめゝわ
ゝまゝまて乃巌せんまゝ

第八

祇丞

奇新の芸乃中乃牡弓々な
と毎妙建し新告而の箕
狙之師柿乃深牧取多ゝむ
大脇差の鮫よ呑きて
くれの毎浜をひゝつかゝ人の
芋も地酒を入渡るこ海

秋風の彩揚ゝ敷く弱法師
幕の袖乞ひ犬の鼻つら
昔から指もさせぬ松たゝし
彩かゝきまて輝く御む神
大門をさんさめうて玉乃輿
潮古の狗はみな人の玄
身重に麻の浴衣と宸かし
暢を四角に浴せ風呂敷

我彩ひ袴そうも五そう
大橋流ハ代度の瞰
山寺うり砂糖をたゝ華心
てゝの目者ハ吹ちゝ風
薮入を釣うゝと彩の日
いろは短哥よ似うう 俤
醒并も番場も義理のう而
うの大木を寄寺山伏

雑兵よ古金貴の呵らまて
はく〳〵汁ゑ柄杓ゑつゑる
水瓶にたゆ〳〵て住鄙乃泡
苗吉を弦ゑ支離かこく
弦上る喧嘩の声い仞利天
身洩る楊枝車ゑり行
きたまゆ六方坪乃ゑ結ひ
秋もわつに角力ゑめゑち

毛蒲園よ乞の膚を打まのせ
自茅ゆ乃ゑる川ゑ乃状
打〳〵よ在家の役ゆ赤豆飯
斤賛付ゑみとゑ子の雲
花よ来て本陸ゑり伝迫至
小田の蛙乃射よ侍くゑ

第九　買明

石川乃かとをたまちあへて蛍哉
枕の方へ曲れ瓜小屋
首引よ矣ひと戸を招くらん
木ゐなくせた行くらけし
夕月に角ゝなるき桐の葉けそとき
小角豆の縁を紫乃秋

初沙弥まきれて眠る時の警
二階住居ハ氣も僻む苦
腰縄を付ぬるうち娘まて
八坂あるうハ谷へわの孔路
牝賣も五度ハ面をかつき侍
今ゝ眼醫者の新も見えす
活經のおろく人を迎たゝひ
ふいこ条ゝ風休むらし

漸くと八日ゝ済る身ぢまと
庵主の所を泊まるい所
叶う面を呑のいやさに花めらう
枝菜乃苦も銭の多掛
種るを馬尼殿出留なれ
菜の陰乃乗這ゆく
失ふて言ふ知れる拂拍
日和ハ絶うて今月を小

ノ出して孫耳へ突付き居る
一光ヲ受て恵に向こき
松の根よりわき出る第一番
目の働きを水車守
里ひ出て氣を汲取る汁
胴人形乃白く光る立
雪乃自然も彼らを忘れ
ちやひ拾ふる舟乃陣

書所とり働き板を踏へ立の
二節よ辭退分乃酒
やうとへ下ふ汁尖傷の長ちよ
きりくと至れか鼓
花の主八十八乃亭主ふの
考察乃國へ負ふて引去

十

秋風

紫乃戸も閉かしよりの雲ぬ峰
すゝの寒農低き日盛
千代ゝ迄須大黒布恵せて
四条毎年笑え安さよ
雲洞へ松ゝ毎年月の歌
幸味大根のかゝひ冷一

俳人の参かをる江戸乃秋
かゝりたけて曲亭馬琴
雷よいよ〳〵きくむ何忘
伊　きき山の名乃井戸
実ある名ハまことに小短く
立出て月　雲乃夕暮
深川や梢さびまる義ガ
下戸ハ早恢ハかろ苦い新

会仏にかさなる新智者学者
かりよ借義ハ袴ハ打こむ
葛籠るとこ下ハ花の色
高の名かけて日をいとふ魚
問きれ今ハ九十の寿ハ
志の野広する森の野　食
恵きりの南法度落ハ祝ひ町
磬むさんて垢離の水裳裳

白雨乃志そこなふるゝ　夕
ちやを拙く本くの弥極
言葉の粥ゝ四ゝ古言乃げ法
精進　嫌い　恵心　たゝ来つ
桐河春の月八偶なる廣小路
すゝくく臨川の辺く太平
酴醾漆とい　宮八人よまきしゝ
寺代皮のまれ徳　計

山鳩のなくも妻こふ雨の中
材木ゝ川木きれのき
天満橋天神橋や難波橋
看にたゝむ舟登の箔
大庭八釈乃譲の花れ傳
麦ふむそらに句ふ　嘯

第十一

樓川

山畑や麻のふりむく番　椒

古稽乃屋屋城ゆる秋風

桐ゆらら産女を月の友にして

羊羹まてい　奏れ城下

志津ヶやゝ縛の脇差深家

引　舟めくそちゝ井の根

伏見なる喧嘩彩は又喧嘩
弓矢小幡山の百姓
揚屋まち債は酔為紫さ
十九のくもハよく美をえる
あさかぶ糊うま婆は死はうち
る乃街ハ多あのの
瓦やく橋場を月ハ豊う彩
灯のまわぬうちは探ぬとる

作屋も寺陽を呑ても高枝
醤者のちくれ友の別者
音は閑唐樹は枯ハ年の雪
建くく大工のちくぬ桝戸
曲水は吐血流下屋表
三味線は川て迷る朗流
銀の梛杉ぬ紫ち又為やすき
恨えの男乃鼻の先智恵

物干す幟の涼
川向ゆく一すれ違
なめりに市女も財布たくん
姑こゝら噛む乃中の蕎麦
今戸つて芦の湯くまゆのそと
唐乃後住とつゝ浪人
卯待ハるまい月代庚申
女ちこ入ゝり絵行灯の果

馬帽子屋も懸ゝ
塀乃蔦首枝ゝ
只御ゝ只活ゝ
小傷の名
数一重あ
雨ゝ清

十二

人ごとの通らで雁の水漬　渭北

葉まばたくね稲荷の髪

くゝ彼岸月物貴の宮かふきて

連歌声ある　國元の唄

赤貝濃氷くゝておもろ

春待　蕨に俵打差也

此仲てすさる硯をいのたくり
吹て蓋にする墨深の袖
たまりけて迹乃猿乃足ゆ裏
屋根うつる石の苔る四阿
つのもない時よ寝入て又おもふ
ふほひ袋を引かとくなり
筑波より吹てわ葉の出の津
和身ゆ紋乃登て棚橋

主従の小尻かへしハ腹こなし
根のすぐい乃拂い尺八
ゆうさくり去のさひき花乃面
ちく稚柳の西面もれ
百子宮稲負鳥呼子鳥
紫宸殿尺て吼る猿人
むめ立て素湯よ甘ミハなのりゆ
菊ちゆ雪日ハいつの雨

おそくれたころわと指る屋さきのこ
添人〳〵を返す出るも
聖浮れ船より戻る肴 竈
祢酒 一寸志みるち芝
打立て彩方ち反の尺寸心
追〳〵とも起す 門口乃鹿
朝の丹度波八すこく赤牛
もまゝ芦乃穂八穿く 花

松島へ象潟ゆけて死況者
盟を踏て這入居凡呂
尾形立て背すゝ景色友 焉
児八書院乃障子うゝ自
袖よりハ花尺車の揚 簾
ちまめきあく星野八竹乃妻

第十三

木髮

時の男麻の角帽かつきて
笛もてる事花の中
盗まれ相撲の釜の蓋なく
走りて雲の如く行る風呂敷
鶏の抱れて足を打表へ
階子を入る義の樋合

楊梅乃接城授れたるの
太夫を二門ほゝ寄に貫
御内儀よ白眼迫さるゝ事履を
下甲さるゝ事淡路の神
付木屋の吹付て渡す貝杓子
太ゝしく吹く日蓮の口
川の月吹きゝられて吹る閻
能勢の刻乃多久六文

為代物ゝ屋る賛牛包
京九条の猶に小使
花の山乞食よ亂いちゝ
犬の流れて仕出ゝ曲水
八重霧あ酒屋の門も約乃具
頬摺をして赤子の彩
おそろきゝ南もの戸二筵
尺八ぬけた四橋ハ間

むすめ髪ちゃんと世帯はたらかず
亡八乃者役にたゝず疎る
石灯籠垂涎つきて気をあ
心の猿乃風ふくゝ乃教
さゝ坊は田舎ゆやく夕暮
水ハ呑まる三日月乃鎌
脇差のとゞもたらぬ盆踊
きゝめくさにこまれ郡内ゆ町

艸の戸や嵐をそえて拂物
精を養に禪ゆすゆ
一門の外ゆなる喧嘩ゆく
旦那乃為なるとゞくゝ揚弓
狗猫の賣口出来て忘さる
こなせはたくゝることの楽ゆ

第十四

旨原

投げ行角力や砂よ松乃新
背中をさするちよの稽
雨なくて海山新く月ちろみ
拳白の海とくるよ旅うつ
るに酒ぬよつと飲せて案外
打とおい包む霜の市人

秋乃うち又梵天さて〜河の中
橋と芝居の猿〜くらし
六ツセ川下ゆく男を誘ひ出し
死なば苦を脇ばく押へく
帷子の晒さむくよれあうり
本の枝折て生仏な秋
芋洗すさ〜小秋まて好きなり
冨嶽那の弁を舟に盆あ

百日に風をまれの鉦太鼓
一町入レさ三圍を綾
恋さて苞の指よき子位鉢
夜乃盛ゑ西乃の礼
色ゑ色付ずこかれて笠ゆ春
盲たるき女房追出す
花ちの如き雅さ来ま男外
盆洗ふ　岡のあまさ川

猟師まで手拭の紙を射ふりきり
胡日夕日に屬、泥乃金
府中とハ腹笠屋ハ入ー町儀
併をさ〳〵いてまい尚祈的
以ハかうさ忘れおいかと〳〵き次
と一夜 奴のたゝ〳〵仮様
大雪乃月よたゝうをこのるのだや
俗て 衣 のきよひえんたゝうん

三味線の撥のくだつて鳥紙ゟ
笹ねゝ乃して呼る為うの茶屋
下駄よさひ〳〵く入ー果ハ豆
あたゝさな史を供年にめて紀
兼ハ真を拭なの滝乃入ゑ
咎ハ乃ハ乃蕨縄 たゝ

十五

和專

秋乃葉の淺き焚火や夜恰
百博士らすの春事
百二部濃艶衣手風高て
川のゆるみ小刀の鞘
甘い柏余ほど多くて月のもえる
打水かけ井筒あり

横雲よりの石の立ち飛のいて
ゆ上腐乃引すれり
胡蘿蔔を力とそふ青物屋
雪になすれ者も物ゝこゝろ
差息子京能たとゝ入たゝ花
らいさい橋ゝ行ゝ俗秘香
松の根に寺ゝ建ゝ俗表示
乾を酢なら足い 孟

月や日乃下よあつゝ雨ゝ霍乱
書ゝ物ゝ畑の烟草
股病の杖にたゝれて行ゝ世
如ゝ向かゝの紅ゝ赤切
赤鱚ゝ高ゝのさまに投ゝれく
ゝ外科ゝ俗日蓮
伽ゝ囲手相まて星乃殘ゝ
佛ゝそゝへの已ゝ産さ

雛形よ逸とい字をべくと出
何年なるそう 検校乃金
京ぢ町 摂津西ぬ なるわ
榊の傳手 猿太夫之
砂糖水人の令を引のはし
知乃便乃細い 箱
此身に眠れくと琵琶の音
涙乃香のする 妹の夜すう

波鳥も羽幕と成よ々
よい芋掘て小俵 動う如
鄙ぞふ見たる人おのま我
一ぢら面の入口ぢの人
牛の子乃寝う巻ぢる 去の下
きつと掛て 来る早 厳

第十六

紀逸

風ひかぬ人の目ばやあるか守
春の庭きもなくなるかれる宮
指よさへ手ふ強ハ少ー淋しく天
ゆそく白よ仕ふ山さ山海
いたつまれ多陰ふ折れ樹ふ乃
聖ふ乃ふ垣も離を

太刀佩く使もぬいて油乃雨
かなたぬ意う弥を抱へ
こ内巴し投てうく奇羅し
二吹限てきまる木の下
夷傳志へす汁よ鯛をすし
江戸の目てたく京の人間
所をの門茶を今ハう表
身の指すうる花魚

摘草を流と出くハ流なし
やゝ入陸をまの是てう
瘧疫病紅信の哥をあゝる苦
さし向てハ凄い行灯
ほゝまなすくなくなるに急
八日乃紅のたもひ入き打
馬喰町数店の上をまゝら
紅もうけい牠の数し

我書てくく夜のり而
かさ〳〵傷多の句〳〵　松扇
胡点八百もしなる方へ氣をとられ
去蔵一枝法田やをくく世
戻る月上戸の額さめのくる
又筆盤紙竪すして尺せ
蓬乃根よ淡のさゝやく湛へ汐
車未てゐる　約束の松

墨日に墨汁　決乃さひる
阿蘭陀揺力　おもしろい地
うき鯉よ山葵の涙くい淡路鴻
歩をそうて去　御屋敷
新〳〵お織仕立るさなる衣
かまそを八重に釣棧畑よ

十七

再賀

紫漬より根の子茶て上至ること
葱大根了低い水際
倫遠は素人かまきく思ふ
釈鮫のない足程の柄
豆砂へ座次踏込門内角
第力大鮫に寸ぐ面ふ

物葺き位牌乃下に敷とまり
幾門借てもも切れぬ　鋸
水牛ハおうい角ぬきと奴
の乃さまさん辰ら加　武
吉ち山花をきホくもれからや
組飾まくかこふ　尚　代
ら縄ふおとなはひのいのかり
青　賣まるも　先ハ　一ち　声

結ふ俵小紙よあきてくれくそり
車もおろこのや伊勢ち嘘つき
丈師を吉きまくれを用の者
何におひして宿る者を
油搗ふ血も吉羅を欲　討
併屋ち杉のなくハない引
門治乃先てくまふ　物　治
縮ち襟のよくき　て　沢

鳥羽尾乃ほのくと
和韻の例よ茶ハこなき多
旅好の服も合点ところよ
桐油ゑるちら手ハ遊ひ如
枇杷乃樹に京ほまい志の咲
ゆ―ゆうむを燭臺乃振
三日月ゑ後ろ姿も似ねる似る
巣を作る地の新を出る

萱菅乃奥ゆ―さを文庫茲
我この惚るく名睡すいすす
死ぬ不さすの男よいをど
奉書にをこ油かるし
稲吟を慶光院を花乃新
巣ゑら萩乃あるゑ瑞籬

十八

石臨

新月を人の往来を六川の汐
皆も多くの露の笑咲
土手茂乃今度は松八性西一事
いくつ呑ても多よ出ぬ月
漏刻乃水せきなき妹が風
戸の明立年雁ぞ鳴人

庵の内温泉へ行るかとの成
泣く子を仮乃ゐ紙さ知
雷よ雲四五雲引かへし
ふハ裏書の二日振やる
時門い修稜を尺せて亟
小姓出く待花ハ衣く
田楽よ舌を焦て三雲行
尾を引ても永き日ハ暮

大勢ハたのもしくと野渡し
取いて来る市の御除
月もたゝ恨附よ冬枯く
恋昔このよ来た盗まる猫
言安ハろくよいものなのの
ゆ〳〵まし経水の味を
さつき毛茄子ハ安いたのわし
子ゆ極乃上の松原

横板へ思ふ所を書き記
直くに隣の家をおいきれ
たつのなる物は突棒刺叉い
三社の託宣傳てやせ
等無乃たまくに人は成あせ
二百十日の祝の大根
はいむ事縄之渡月橋
楮の花乃殘る多入

別當もいそくるる七面
おろ大根の菜ハ淋支
見なとの長屋は煙の一ツなり
靜乃四ろ行ける行末
乃連も寺の仁兼の世山
男むすひは野辺の事

廿十九

蝸名

白妙に言しかき消や雪の上

枯木さへ猿猴の曲

うつの声とちんさよ鼻をたもつの秋

炭ハ髪なき　奴ちりうり

二階叩く時ハ月のさんさ降

暮　まつ　初く初汐

[illegible]
一升注ぎ泪あてうふ
胡麻汁の突き[illegible]
[illegible]の[illegible]乃面く門の鶏
賜を[illegible]入るものふん
心あまりて[illegible]絵[illegible]
[illegible]
[illegible]の松が涼を[illegible]
[illegible]も被[illegible]乃蔕子流[illegible]

南無大慈大悲と續くロの内
景清 [illegible]
人間の分別[illegible]
御祓第を背負てお[illegible]
肝の乃熊野松尾を貸[illegible]
尚守よ[illegible]て[illegible]秋の友達
雷が焦[illegible]が舟を引上て
胡[illegible]合野鴻金沢

仮ゑ酒のけて咲くも伊達おしや
元まいせいと誰のうこさん
枯蓮尺ゑすの砂の深火縄
毎日ゑ繋く賽銭の対
ゑしてハ虚欲くの人あつめ
黄粉をつけて投む南瓜
宿ゑ名所の石の殿ゑ遠いしらり
出合ゑ らゑ波と稲妻

常なる庶ゑ庶ゑ化ぬ世捨人
余所乃雛子の煙嫌する
何をなて一羽ゑ鳥やのまき
花のあゑ うゑ廣法寺お
長紀日に古き多ゑ石さら
詩ゑ作ゑ ゑ まの 給

岩井

馬勃

百年待日乃教ヲん尼拂ひ
宮如樹の生れる色
俵うゝ虫ゝ喰まる扶持ゑて
在る別て重ね駱
行春のゝ金ゝ雲ゝ色いつくゝ
何恙てもよき秋と成ゝ

蕭市よりいさゝく幣ハ乳の素
江戸さしてめての代を見おろす
男次うて胴突乃縄引より
乳母ゑ出ぬゑと他人のうらふ
ゑゝとろ乃鞴ハ吉もかたのあるる
門ハ泥乃背戸ハ左ゝ雪
入聟を古いい唄てあてこすり
金の陽れと猪牙を一艘

夕方に入活ゆる件如人
腹ハ足ぬゝ吸物を出す
首筋を乳の登ハ花奉行
藪入の来て枕ハ法ゝ世
拭ふも極りと毎夫ぬ嬉戯の釈迦
十町西方浄土乃如
計の諸保き奥ゝ拭て出る
亟鴨の卵ゝやる炎天

出千ゝ岩ゝ抜き乃又も青葉
施行の垣乃角ゝ一日
暮れ今下ゝてたゝゝけぬゝ乃
箱根乃関て解ゝ雲髪
巻る令黄ゝ令儀日の延て
ねまれくまゝ雨の弓張
亭主乃氣知き安きの座敷
くりゝゝと推のかゝろく

雲後すて何を一ゝ又習いたゝ
声低なゝゝて天晴を暮者
サーおのゝるを起居と地を跳る
中ゝ岩ゝのゝ此乃結
我子にくゝ花ゝゝつか猿
嘯ゝのゝ川ゝ見る事

爽

蕉雨一回くゝ乃おと水　羊素菴　柢完

夏

馬の尾よ縄乃うゑ暑ち哉

秋

蓼ハよい迄ひゝ身一茶

冬

淋しさの心の裏ゝ祇世身

栖隠之吟二首

秋寂寞乃机のうへ
忽然と沈むー
ひとり門を閉て居る
這ふて居るくとた
ゆふ餉あるひ
入る事を待ひ
味ふ為来を賞めたハ

黙齋

ものゝ
まわりて
糊仮をむきする
成るかまつの為ー首

七十翁 常仙

蝶のぬ子供ハ六孫入ぬきめ式
がうろきの蝿ぬかちまやあふ虫

城
とゝふまと然哥仙ハ
なのくゝ志ゝあをせゝう
梅ゑ起てゝ乃花百美
の魁とをしれた四時の美
什先朋ゑ屋
梅の月ゝう羅朋ゑ小四乃

[illegible]の[illegible]を[illegible]出かさりの
[illegible]
花の[illegible]秀[illegible]の[illegible]の
[illegible]わ[illegible]時の
香乃世[illegible]を[illegible]手中
のいと[illegible]と[illegible]糸
[illegible]

いへ[illegible]のハ價ゑ嚢中の
錢を惜[illegible]
詩酒の媒[illegible]
美[illegible]人を[illegible]
[illegible]
牡丹ハ李唐の風流を
[illegible]遊子の

こし方は秋の夕ぐれ
夕暮の空
雲の峰
鳴かつまむ
やう〳〵
初秋の日
のそえて
初鹿の声
の角力
を高の中
夜給
も性
か事の日
紫貫

文王を祠る翁有りて漢村の
夕陽に田を出る時新を
新晴の興を催して雪
の春もほのぼのと霞まつ宿の
きさらぎの志有りて
ことしく瓦拂如心常春
業まで其姿情をつくす

謝脩の自在を河内にて
為しを(に)事丑秋七月
影華徑の隅に花葉
おもあり

雲松軒住

山京